The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大正初期における翻訳少女小説の一様相 : エクトール・マロ原作『家なき娘』の初の邦訳をめぐって
Author(s)	渡辺, 貴規子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 34-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大正初期における翻訳少女小説の一様相
―エクトール・マロ原作『家なき娘』の初の邦訳をめぐって―

渡辺貴規子

１　はじめに

エクトール・マロ（Hector Malot, 1830-1907）原作、*En famille*(1893)は、『家なき娘』の邦題で知られるフランス児童文学作品である。日本では、同じマロ原作の『家なき子』(原題：*Sans famille*, 1878)とともに知られ、1978 年には *En famille* を原作としたアニメーション作品、「ペリーヌ物語」が「世界名作劇場」シリーズの 1 作としてテレビで放映され人気を博した。

En famille は、主人公の少女、ペリーヌが両親と死別後、会ったことのない父方の祖父が経営する紡績企業で身分を隠して働き、自分で運命を切り開く様子を描いた小説である。日本では 1917 年に「雛燕」のタイトルで初めて翻訳された。翻訳者は『家なき子』の初の邦訳、『家庭小説　未だ見ぬ親』（1903 年）と同じ、五来素川（本名：五来欣造、1875-1944）である。『雛燕』は婦人之友社の少女雑誌『新少女』第 3 巻第 1 号から第 3 巻第 9 号（1917 年 1 月～同年 9 月）に連載され、連載が好評であったため、翌年同社から単行本が上梓された。

明治後期から大正初期の少女雑誌の言説は、良妻賢母主義規範に大きく影響を受けた[1]。その中で、主人公が女子工員、通訳、秘書という職業に就き、困難には自力で立ち向かう、きわめて自立的な少女として描かれたこの小説は、日本の少女読者に向け、どのように翻訳されたのであろうか。そして翻訳において原典からの改変が見られるなら、どのように改変され、どのような主人公像が描かれたのであろうか。本稿の目的は、『雛燕』の翻訳の様相について、描かれる少女像の原典との相違、およびその背景の一端を明らかにすることである。

本稿の構成は、以下の通りである。第 2 節では、原作者エクトール・マロが *En famille* を執筆した意図、原作の梗概、および女子教育の観点から見た場合の特徴について整理する。第 3 節では、「雛燕」が連載された雑誌『新少女』の特徴について、紙上の言説を検討し考察する。第 4 節では翻訳者・五来素川の女性観を検討する。第 5 節、第 6 節において、小説の構成及び本文について、原典と翻訳とを比較し、翻訳の様相について検討する。最後に第 7 節でまとめを付す。

２　原作者エクトール・マロと *En famille*(1893)―女子教育の観点から

エクトール・マロは、1830 年にノルマンディー地方の村ラ・ブイユに、村長かつ公証人の次男として生まれた。1859 年にデビュー作『愛人たち』（*Les Amants*）を公刊し、1896 年の断筆宣言までに 59 作品 65 巻の小説を発表した。作品には写実主義、自然主義の影響が色濃く見られ、政治的には 1848 年の二月革命以降、共和主義、反教権主義の立場を取った。[2]

マロの代表作であり、フランス児童文学の古典的名作でもある『家なき子』は、『教育娯楽雑誌』（*Revue d'éducation et de récréation* , 1864 年創刊）の編集長で、当時のフランス児童文学出版産業を牽引したピエール＝ジュール・エッツェル（Pierre-Jules Hetzel, 1814-1886）からの依頼を契機として執筆された。マロによれば、*Sans famille* は 1878 年の単行本の出版

本稿における原典と翻訳の比較には、次の版を用いた。Hector Malot, *En famille*, (1893), Amiens, Le Goût d'Etre/Encrage, 2006.（以下、この文献の引用時には *EF* という略字で示す。）五来素川、『雛燕』、婦人之友社、1918 年。（以下、この文献の引用時には『雛燕』と示す。）なお、本稿における引用の欧文文献の訳は、すべて拙訳である。日本語文献を引用する際には、可能な限り旧字体を新字体に書き改め、ルビは適宜省略した。

[1] たとえば明治時代後期に創刊された代表的な少女雑誌、『少女世界』（博文館、1906 年創刊）は、明治期の女子教育に基づく修養、修身、手芸、読物など良妻賢母的な内容であったとされる。また、『少女界』（金港堂、1901 年創刊）にも、女子は将来家内で男子を支える役割があるという教えがしばしば繰り返された。（Cf. 日本児童文学学会編『児童文学事典』、東京書籍、1988 年、379 頁。渡辺貴規子「明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ･ダルクの伝記―ヒロイン像の変容をめぐって」『言語文化の比較と交流』9 号、2022 年、1-10 頁。）

[2] 渡辺貴規子『『家なき子』の原典と初期邦訳の文化社会史的研究』、風間書房、2018 年、10-20 頁。

以降、翌年末までにすでに 17 版を重ね、続編を書いてほしいという依頼も後を絶たなかった。そして 15 年後にようやく「対（le pendant）」となる作品として *En famille* を出版した。[3]

Sans famille が男児を主人公としたのに対し、*En famille* の主人公は女児である。これにはマロの私生活との関わりが深いと推定されている。マロは 1868 年に生まれた一人娘のリュシーを大変かわいがり、『家なき子』は彼女に捧げた。そして 1893 年、*En famille* の出版と同年にはリュシーが女児を産んだ。孫娘の名前はペリーヌ、*En famille* の主人公と同じ名前である。マロは、孫娘の教育に熱心であり、2019 年には、ペリーヌの成長観察記録「ペリーヌ手帳（Carnet Perrine)」が活字化されている[4]。成長を熱心に見守った孫娘と、同じ名前を持つ少女が主人公である小説、*En famille* には、マロの女子教育観が反映されたと考えられる。

マロは小説の中でしばしば児童教育のテーマを扱った。たとえば『家なき子』には、当時、フランス共和国議会においてまさに議論されていた、新しい共和主義的初等教育の内容が含まれた[5]。しかし *En famille* にはむしろ、学校教育に縛られない独自の教育が描かれた。もともとマロが知育偏重型の学校教育を疑問視したのに加え、主人公が十代前半の少女であることとも関係が深いと考えられる。複数の小説の分析を通し、マロの女子教育観を考察したギュイユメット・ティゾンによると、マロは、標準的な女子中等教育機関であった修道院と寄宿舎における教育を有害なものと見なし、その代わりに、「自然とのふれあいや、熱心な両親のおかげで個々の美点を伸ばす」教育を自立的な女性を育てる教育として評価した[6]。

事実、*En famille* においても、両親からの遺言や教訓に導かれ、様々な困難を乗り越える主人公の姿、そして戸外での生活の中でまるでロビンソン・クルーソーのように、自然にあるものだけで生活を整え、創造性を発揮する様子が描かれている。後者は、ヨーロッパ児童文学における「ロビンソナード[7]」の系譜に連なる場面として、小説の重要な特徴の一つを成している。マロは自身の創作に関する回想録『私の小説の物語』（*Le Roman de mes romans*, 1896）で、*En famille* に関し次のように述べた。

> 何度も、鉄道で私はソム県の谷をたどった。そして車両の窓から私はこれらの泥炭地を見た。しかし、車両の中から観察したって何になろう？私が谷の深い切込みの何たるかを学び、この小説の女主人公のアイディアを含む全体構想を得たのは、その草原を歩いている時のことであった。（…）実は私が追求したかったのは物語の筋というよりも、ある観念の発展であった。（…）*En famille* を導いた最も重要なもの、それは意志の研究である。私が適用したかったもの、それは、ある人格の中に意志が育成されること、意志の働き、意志が成し遂げる奇蹟である。(…)ありのままの厳しい自然の中を歩き、私にはすぐに、泥炭地の中にある島で孤立している、意志の力を備えた女の子を完成させうるものが見えた。そして意志の力による絶え間ない努力以外に何の支えもなく、そこで彼女がどう生きたのかということが分かった。[8]

---

[3] Hector Malot, *Le Roman de mes romans*, Flammarion, 1896, réédité dans les *Cahiers Robinson*, n° 13, Presses de l'Université d'Artois, 2003, p.99, 188-189.

[4] Hector Malot, « Carnet Perrine »(1893-1900), *Cahiers Robinson*, No.45, 2019, p.63-70.

[5] 渡辺貴規子、前掲書、42-141 頁。

[6] Guillemette Tison, « L'éducation des filles dans les romans d'Hector Malot », *Cahiers Robinson*, No.45, 2019, p.37-46.

[7] フランシス・マルコワンの定義では、「ロビンソンナード」は、ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ『若者たちのロビンソン』（Joachim Heinrich Campe, *Robinson der Jüngere*, 1779）、ヨハン・ダヴィッド・ウィース『スイスのロビンソン』（Johann David Wyss, *Der Schweizerische Robinson*, 1813）をはじめ、『ロビンソン・クルーソー』に着想を得て書かれたヨーロッパ文学の一連の作品群を指す。フランスでは 1840 年から 1875 年までに 43 作品を数え、マロの作品では児童文学作品『ロマン・カルブリス』（*Romain Kalbris*, 1867/1869）、『家なき娘』の中に「ロビンソナード」のエピソードが見いだされる。（Cf. Francis Marcoin, *Librairie de jeunesse et littérature industrielle au XIXe siècle*, Paris, Honoré Champion, 2006, p.83-92. Yves Pincet, « Variation sur le thème de Robinson dans l'œuvre romanesque d'Hector Malot », in *Cahiers pour la littérature populaire*, La Seyne-sur-Mer, Centre pour l'étude sur la littérature populaire, 1996, p.75-86.）

[8] Hector Malot, *op.cit.*, *Le Roman de mes romans*, p.191-192.

このように、マロは小説の主題に「意志の研究」を据えたと述べた。そして小説の着想を得たのは、小説の舞台であり、上述した「ロビンソナード」が展開するフランス北部ソム県の泥炭地を、作家自身が歩いた時だったと述べられる。この引用から、主人公の少女が「意志の力による絶え間ない努力以外に何の支えもな」い状態でいかに生き抜くか、ということに描写の重点が置かれたと判明する。

小説の中で主人公が受ける過酷な試練は主に三つある。第一に、父親と母親の相次ぐ死、そして孤児となる経験である。第二に、母親と死別したパリから、フランス北部ソム県の架空の都市で、父方の祖父が紡績企業を経営するマロクールまで、嵐や飢えに襲われ瀕死の状態に陥りつつ、一人で歩いて旅をする経験である。これは身体的にも、精神的にも、物語の中で最も過酷なエピソードの一つである。主人公は「お父さんは何度も言ったじゃないか、危険の中で助かるチャンスは最後まで戦う者にあるのだ、と[9]」と父親の教えを胸に何とか乗り越えようとする。しかし一時は道中で死を覚悟する様子さえも書かれている[10]。第三に、マロクールに到着後、祖父が経営する紡績企業で、素性を明かさぬまま女子工員、通訳、秘書として働き、その中で会社の経営権をめぐる陰謀に巻き込まれる経験である。主人公は身の処し方を考え、結末で祖父に自分が孫娘であることを告白し、家族としての再会を果たす。同時に祖父の後継者として、劣悪な労働環境で苦しむ従業員の救済を開始するのである。

こうした三つの試練に加え、先述した「ロビンソナード」のエピソードがある。女子工員たちが集団で寝泊まりする部屋の息苦しさに耐えかねた主人公が、泥炭掘の狩猟小屋で創意工夫して衣食住をまかない、生活するというものである。主人公は、実生活で遭遇する困難を克服し、たった一人で創意工夫を重ね自然の中で生活することで、意志を鍛錬し、自発的に考え、行動できる人間へと成長する。同時に結末では、紡績企業の後継者として、従業員の幸福のために行動する頼もしい経営者になる。自分の才能を活かし、成功する少女を描くこの小説は、大正初期の少女雑誌の中でどのように紹介されたのであろうか。

３　「雛燕」の掲載誌『新少女』について

本稿第 3 節と第 4 節では、『新少女』と翻訳者・五来素川の女性観を確認する。興味深いことに、両者は逆の方向性を持ち、翻訳にも関係したと考えられる。

『新少女』は羽仁もと子(1873-1957)が創立した婦人之友社から、雑誌『子供之友』（1914 年創刊）の姉妹誌として 1915 年 4 月に創刊された少女雑誌である。羽仁もと子は青森県八戸市に生まれ、巌本善治が校長の明治女学校に学んだ後、地元で最初の結婚をするも間もなく離縁した。1897 年に再度上京し、報知新聞社に入社、1899 年には記者となった。いわゆる「職業婦人」の先駆的存在であり、日本で初めての女性新聞記者であるとも言われる。1901 年に同僚であった羽仁吉一と再婚、その後二人で婦人之友社を設立した。家庭生活の合理化を唱えた思想家、そして自由学園の創立者としても知られる。[11]

『新少女』は、絵画部門主任として竹久夢二を迎えたことで知られるものの、この少女雑誌に関する先行研究はわずかしかない[12]。『新少女』はどのような雑誌であり、紙面においてどのような少女が理想とされたのであろうか。たとえば創刊号の編集後記には、「新少女」という雑誌名が編集者たちの「めいめいの新しい望み」を表し、「その進歩的なることに於

---

[9] *EF*, p.73.

[10] 次のように書かれた。「いいわ、死にましょう。もう抵抗することも、これ以上戦うこともする必要はない。戦いたくても、もう出来ないもの。お父さんも死んだ、お母さんも死んだ。今度は私の番。そして、うつろな頭をよぎった考えの中で、最も残酷だったのは、こんなふうにみじめな獣のように溝の中で死ぬのなら、父や母と一緒に死ねたら良かったのに、という思いだった。」（*EF*, p.81-82. 拙訳）

[11]『羽仁もと子著作集第 14 巻　半生を語る』、婦人之友社、1981 年。斎藤道子『羽仁もと子　生涯と思想』、ドメス出版、1988 年。西村絢子「羽仁もと子の教育論―女子教育観と生活主義教育の系譜について」『教育学研究』、40 巻 3 号、1973 年、242-250 頁。葛井義憲「羽仁もと子、吉一論―家庭と子どもと婦人」『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』、新教出版社、217-251 頁。

[12] 小嶋洋子「竹久夢二と少女文化―『新少女』投稿画評と投稿画の変遷」『大正イマジュリィ』、No.6, 2010 年、82-97 頁。小嶋洋子「『新少女』における夢二と少女とキリスト教」『美学研究』、26 号、2011 年、27-42 頁。

て、その面白味の沢山なることに於て、真実に皆様の楽しき友達の一人でありたいと思ひます」と、「進歩的」かつ「面白味」の多い紙面を目指すという抱負が示された[13]。

翌年には「新しい女」という語について、次の引用の記事が掲載された。「新しい女」とは 1913 年に平塚らいてう（1886-1971）が『中央公論』誌上で「自分は新しい女である」と公言し、流行語となった言葉である。明治末期から大正期にかけて、良妻賢母主義批判の言説として、社会主義者による「良妻賢母」批判とともに「新しい女」の言説が現れていた[14]。実際に、良妻賢母主義の抑圧を乗り越えて自己主張し、多分野の職業で活躍した女性たちが新聞記事で伝えられてもいた[15]。

> 「新しい女」といふのは近頃の流行言葉ですから、皆さんの中には小耳にはさんでゐる方もあるでせう。流行言葉に余り深い意味のないもので、私などから見ると皆さんは凡て新しい少女です。（…）苟も人間として生きて行く以上は、凡てが新しい人間です。新しい人間でなくてはなりません。わざわざ「新しい女」と女にだけさういふのは、世間狭い人たちが面白半分の好奇心から出た流行言葉で、永く「新しい女」などいふ言葉が行はれるとも思はれません。皆さんはさういふ言葉があるからと云つて、何か一種別のもののやうに考へる必要は少しもありません[16]。

「新しい女」という語が「世間狭い人たち」の「面白半分の好奇心」から出ており、自我に目覚めた女性たちへの揶揄や批判を含む点に苦言が呈された[17]。『新少女』では、「新しい女」は「新しい人間」のひとつと捉えられ、「何か一種別のもののやうに考へる必要は少しもありません」と、男女の別なく普遍的な存在と見なされている。同時に読者全員が「新しい少女」であると書かれてもいる。これからの時代を生きる「新しい少女」が読む「進歩的」な雑誌となることが編集方針であったと言える。

ここで、『新少女』の記事から判明した、雑誌の「進歩的」な側面について三点に整理する。第一に、読者が自分の頭で考え、自分のことは自分で決め、主体的に行動することを説いた。たとえば、創刊号に掲載された羽仁もと子による「新少女伝」には、「めいめいに子供の時から、よく気をつけて、自分のことは自分でするやうに、またよく考へて、自分の道は自分で歩む様にしなければなりません。[18]」という教えが付された。さらに同年の羽仁の論説では、以下の記述がある。

> 併し私は（…）父母のいひつけを守らう守らうとばかり思つてゐる少女を、上の上の少女だとは思つてゐません。といふのは私は少女といふものは、いつでも親や先生の仰る通りにならなくても良いものだと思つてゐるからで御座います。（…）人といふものは生れた時から、一生懸命に自分で自分を護り育てて行かなければならないやうに出来てゐるのです。（…）あなた方の体や心を、本当に護り、養ひ育てて行く人は、あなた方自身の外にはありません。[19]

---

[13] 「雑司ヶ谷より」『新少女』第 1 巻第 1 号、1915 年 4 月、119 頁。

[14] 牟田和恵『戦略としての家族』、新曜社、1996 年、119-120 頁。社会主義者や「新しい女」の言説における良妻賢母主義批判、および良妻賢母主義擁護論については、深谷昌志の分析を参照した。（Cf. 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』、黎明書房、1966 年、228-237、251-267 頁。）

[15] 『東京朝日新聞』の連載「東京の女」シリーズ（1909 年 8 月 29 日—同年 10 月 22 日）、『読売新聞』の連載「新しい女」シリーズ（1912 年 5 月 5 日—同年 6 月 13 日）がそういった記事に当たる。（Cf.佐伯順子『明治〈美人〉論』NHK 出版、2012 年、172-195 頁）

[16] 「新しい女と言ふ語」『新少女』第 2 巻第 12 号、1916 年 12 月、104-105 頁。

[17] もともとは、英語の”New Woman”の正式な訳語「新婦人」があった。しかしそこから派生した「新しい女」という語の方が、「新婦人」と比較して、社会や男性たちからの非難と悪罵の要素が込められた。（Cf. 堀場清子『青鞜の時代—平塚らいてうと新しい女たち』、岩波新書、1988 年、176-181 頁。）

[18] 羽仁もと子「新少女伝　八百屋お七」『新少女』第 1 巻第 1 号、1915 年 4 月、11 頁。

[19] 羽仁もと子「少女はどうしても親や先生の仰有る通りになければならないものでせうか」『新少女』第 1 巻第 9 号、1915 年 12 月、27-29 頁。

このように、羽仁は創刊当初から、自分のことは自分で考え、決め、生きることを説いた。「父母のいひつけ」さえも盲目的に従ってはならず、「あなた方の体や心を、本当に護り、養ひ育てて行く人は、あなた方自身の外にはありません」と、自分の身体、心、人生はあくまで自分自身のものであるという教えが看取できる。

第二に、少女読者たちが身体を丈夫にし、体を積極的に動かすことを推奨した。1916 年には『新少女』運動部も作られ、その紹介記事には次のように述べられた。

> 私どもはまづ第一に身体が丈夫でなくてはなりません。身体が弱くつては力いつぱい勉強することも出来なければ、愉快に遊ぶことも出来ません。大きくなつて、立派な母親になつて、子供を育ててゆくことも出来なければ、進んで世の中のために有用な働きをすることも出来ません。[20]

身体を丈夫にする目的は「立派な母親になつて、子供を育ててゆく」ことだけでなく、「進んで世の中のために有用な働きをする」ことであるとされた。この背景には、読者の中に女学生のみならず、働く若い女性もいたことも挙げられる。『新少女』の読者投稿欄では、女中や奉公人として働く少女読者からの投稿、彼女たちを励ます編集者の言葉が見られる。また、時には男子のように活動的でも良いとされた。イギリスの上流階級出身の少女たちが乗馬・狩猟に行くことを紹介した記事では「優しげな貴婦人、花のやうな令嬢たちが、障害物やら柵やらを、物の数ともせずに乗り越えて、同行の男子をして顔色ならしめることも、決して珍らしくはないと申します[21]」と述べられた。

第三に西洋文化を積極的に紹介した。ヨーロッパの少女の生活や文化の紹介、ディケンズの『ニコラス・ニクルビー』（*Nicholas Nickleby*, 1838-1839）の翻訳、ヨーロッパの偉人伝の連載など、毎号のようにヨーロッパに関連する記事が掲載され、「雛燕」も第三巻の目玉となる連載として、次のように紹介された。

> 『新少女』も愈々三年目のお正月を迎へることになりました。（…）『まだ見ぬ親』の訳者として名高い五来先生が、仏蘭西の面白い小説を、新年号から続きものにして皆さんのために書いてくださいます。キツト大評判になることでせう。（…）ますます好い材料を選んで、本誌が少女雑誌中の最もはつきりした良雑誌であるといふ世評に背かないやうにいたします。[22]

以上のように、『新少女』は、*En famille* の翻訳が発表される場としては、比較的適した雑誌であったと言える。*En famille* の主人公が、両親の死後、自分自身の判断で行動する少女であった点、一人で旅をし、工場で工員や通訳として働く活動的な人物であった点では、『新少女』における「新しい少女」像とペリーヌ像は合致する部分が多い。そしてこの小説がフランスで発表された比較的新しい作品であった点も、西洋文化を積極的に紹介した『新少女』にとっては好ましかったであろう。後述するように、『雛燕』では *En famille* のあらすじは尊重されて翻訳され、雑誌にとって読者を惹きつける重要な連載であったのである[23]。

４　翻訳者・五来素川の女性観

まず、五来素川の経歴を『雛燕』を翻訳するまでを中心に述べる。茨城県の士族出身の五来は、弁護士、ジャーナリスト、文筆家、早稲田大学教授と、多方面で活躍した。東京帝国大学法科大学仏法学科を卒業し、フランス語は青年時代からきわめて堪能であった。したがって、*En famille* の翻訳もフランス語の原典から直接なされたと考えられる。1902 年に読売

---

[20] 「『新少女』運動部の新設」『新少女』第 2 巻第 2 号、1916 年 2 月、34 頁。

[21] 「馬に乗つて狩猟にゆく西洋の少女」『新少女』第 1 巻第 1 号、1915 年 4 月、63 頁。

[22] 「新年号予告」『新少女』第 2 巻第 12 号、1916 年 12 月、102-103 頁。

[23] たとえば、読者投稿欄で次のようなやり取りが見いだされる。「『雛燕』はほんとに面白い小説でございましたね、五来先生に御礼申し上げます、記者さま何うぞあれを一冊の本にしてお出し下さい。（みつ子）/ 「雛燕」はきれいな一冊の書物にして本社から出版するつもりです。（記者）」（「読者だより」『新少女』第 3 巻第 10 号、1917 年 10 月、38 頁。）

新聞社に入社し、マロ原作『家なき子』の翻案の連載が人気となった。1904 年、読売新聞特派員として渡仏、ベルリン在住を経て 1914 年春に帰国した。帰国後、『大帝那翁』（1914 年）、『仏蘭西及仏蘭西人』（1915 年）などフランス文化・歴史を紹介する書籍を出版し、1916 年にはフランス政府の後援を受けアルベール・メーボンが創刊した雑誌『極東時報』の編集長に就任した[24]。劇作家エドモン・ロスタン（Edmond Rostand,1868-1918）が亡くなった際には、戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』(原題：*Cyrano de Bergerac*, 1897)の翻案「白野十郎」を『極東時報』に連載した[25]。

五来が *En famille* を翻訳したのは、彼が『家なき子』をすでに翻訳していたことが影響したと推測される。約 10 年間のヨーロッパ生活の中で *En famille* の原典が見出された可能性も大きい。1910 年代は五来が日仏交流の促進に努めた時期であるため、『新少女』への連載の依頼を受け、少女が主人公のこのフランスの小説を選んだのは自然であったかもしれない。

しかしながら、『新少女』の方針とは異なり、五来は保守的な女性観の持ち主であったと考えられる。五来の女性観が看取できる文章は少ない。しかしその中で、『雛燕』の出版と近い時期には、次の記事が見いだされる。

> 家族主義の社会では、結婚は全く子供を得て家を継続して行く為めで、決して夫婦の幸福の為めではない。従つて結婚は家と家とがするので、当人同士がするのでない。(…)新道徳の見地から云へば、夫婦の幸福の為め舅姑は別居すべきであるが、然し他に一の理由があつて、之が実行を難じさせるものがある。それは老父母扶養の義務である。(…)是は美風である。（…）現今の急務は、一方には嫁が犠牲となつて舅姑と同居し、他方には舅姑が嫁を虐待せぬ様にしたい。[26]

五来は『未だ見ぬ親』を翻訳した頃から、日本の家族のあり方を旧来の家族主義と、新しい個人主義の二項対立として捉え、家族主義において子が親を、弟が兄を、妻が夫を敬い従う慣習、犠牲的精神を美徳と考えていた[27]。引用は、舅と姑が夫婦と同居すべきと主張したものである。新道徳、つまり個人主義の考え方では別居すべきとされるが、日本には子が親を扶養するという義務、美しい習慣があるので「嫁が犠牲となつて舅姑と同居」すべきであると結論づける。また五来は、家庭では妻・母が中心となるべきであると次の文で主張する。

> 私の家庭には本年五歳の和夫といふのがおります。（…）「坊ちやんはお父様とお母様が好き、ミッコチャン（長女光子三歳）は婆やとお母様が好き、サーチヤン（次女幸子当歳）は姉やとお母様が好き、お父様は子供達とお母様が好き、皆んながお母様が好きなんだわねー」と云ふのです。彼れの小さき脳に映る家庭観は母が中心であると云ふことなのです。そして母は愛情の発光点であり、愛の絆を以て家族全体を結び付けて、自分の周囲に集中さして居ると云ふのです。そして其愛の絆は亦は愛の鉄槌となり、子供の性格を鍛えて居るのです。是は新しい家庭にも旧い家庭にも変らない真理です。[28]

自らの家庭での息子の「皆んながお母様が好き」という言葉を例に挙げ、妻・母が「愛情の発光点であり、愛の絆を以て家族全体を結び付け」るということが「新しい家庭にも旧い家庭にも変らない真理」であると一般化、普遍化して述べている。さらに 1930 年代には、夫婦のあり方を説いた、次の五来の文章が見出される。

---

[24] 岸川俊太郎「『極東時報』という〈日仏交流〉—『極東時報』総目次の公開にあたって」『リテラシー史研究』3 号、2010 年、55-62 頁。岸川俊太郎「もうひとつの『ふらんす物語』—アルベール・メーボン社長兼主筆『極東時報』から永井荷風まで」『比較文学年誌』、46 号、2010 年、120-135 頁。

[25] 五来素川「劇詩家ロスタン死す」『極東時報』第 81 号、1918 年 12 月、32-35 頁。ロスタン作、素川訳「史劇　白野十郎（シラノ・ド・ベルデュラツク）」、『極東時報』、第 81 号・第 83 号・第 85 号（連載）、1918 年 12 月～1919 年 2 月。

[26] 五来素川「舅姑別居の可否得失」『婦人之友』10 巻 5 号、1916 年 5 月、28-29 頁。

[27] 五来欣造「家族制度ト個人制度トノ得失」『法学士林』3 巻 21 号、1901 年 7 月、43-56 頁。渡辺貴規子、前掲書、「五来素川の家族観—『家族主義』から『個人主義』へ」、298-302 頁。

[28] 五来素川「新時代の家庭におくる言葉」『婦人之友』18 巻 2 号、1924 年 2 月、44 頁。

私は、夫婦といふものは、月並な言方ではあるが、日と月のやうなものであると思つてゐる。夫は太陽の如くその光によつてすべて自分の周囲にあるものを、幸福にせねばやまないといふ温情を持つべきである。（…）妻は月であらねばならぬ。月は日の光を反映して始めて輝く。彼女の使命はその柔い光を以て自己の四面を美化することにある。（…）月は日の光を反映して始めて輝く。従つて月の光は日の光の反射に過ぎない。（…）月は日の光によつて始めて輝く。月は自分の光を自分から出るものと考へてはならぬ。自分の容貌や自分の才知によつて自分が輝くものと考へてはならぬ。婦人には謙譲の美徳が最も大切である。[29]

女性は家庭でこそ、妻、母として本領を発揮できるという、良妻賢母主義に則った考え方を五来が持っていたと判明する。最後の引用では、夫を太陽に、妻を月にたとえ、「月は日の光を反映して始めて輝く」と繰り返し、「自分の才知によって自分が輝くものと考えてはならぬ」と、女性が自らの能力を活かして生きることを否定する文さえ見られる。保守的な女性観を持つ五来は、*En famille* を読み、主人公が主体的に能力を発揮して道を切り開く姿をどのように捉えたのであろうか。実際のところ、原作者マロが「意志の研究」という主題を意識して執筆したと考えられる箇所は、次節から見るように大幅に改変されたのである。

５　原典と翻訳の構成の比較

本章では、単行本の『雛燕』と原典の章の構成を比較し、翻訳の様相の特徴を探る。原典の *En famille* は 40 章で構成される。それを『雛燕』では 24 章に分けて翻訳された。原典の第 1 章から第 5 章では、主人公と病気の母親がパリに到着してから、母親と死別するまでが書かれた。第 6 章から第 10 章には、パリからマロクールへの主人公の一人旅が描かれ、第 11 章から第 17 章で、主人公が実の祖父が経営する紡績企業で身分を隠して女子工員として働くエピソードが展開した。第 18 章から第 22 章において、インド育ちの主人公が英語運用能力を活かして通訳として働きはじめ、「ロビンソナード」のエピソードも見受けられる。第 23 章から第 30 章に、通訳として働く中で判明する、企業の経営権をめぐる陰謀が描かれる。第 31 章から第 40 章では、経営者（祖父）の秘書となった主人公の生活、主人公の祖父と主人公の両親が絶縁状態となった経緯、従業員たちの労働環境改善計画などが書かれた上で、結末で主人公は自らの素性を明かし、祖父と家族としての再会を果たすとともに、後継者として企業改革を実現していく。

原典の 40 章の中で、第 7 章から第 9 章、第 13 章、第 15 章、第 17 章、第 19 章から第 22 章、第 35 章の 11 章が省略され、残りの 29 章が『雛燕』において翻訳された。五来は、『家庭小説　未だ見ぬ親』の翻訳でも、原典の『家なき子』の 44 章のうち 17 章を省略し、筋がつながらない部分には自ら創作を加え、あらすじを変えた[30]。一方『雛燕』では、章構成は改変されたものの、省略された章で起こる出来事の経緯の説明だけは、前後の章の翻訳に加えられ、あらすじが尊重された。

省略された第 7 章から第 9 章は、主人公が瀕死の経験をしながら、一人で歩いてパリからマロクールまで旅をする場面である。したがって、主人公が嵐や飢えに襲われた極限の状況の中で、自らを奮い立たせる場面、死を覚悟する場面は削除された。さらに翻訳では、主人公の徒歩での旅は、汽車の旅に改変された。パリからマロクールへの移動は、翻訳ではわずか 6 行で表現され[31]、汽車から降りた後で街をさまよい、「飢ゑと疲れで、力の尽き果てた」（『雛燕』、94 頁）様子が描かれたのみである。

次に、原典の第 15 章、および第 19 章から第 22 章は、「ロビンソナード」のエピソード、つまり主人公が泥炭掘の狩猟小屋で自給自足の生活を送るエピソードに割かれた。本稿第 2 章で言及したように、主人公が一人で創意工夫を重ねて生活を送るこのエピソードは、小説の主題が「意志の研究」であることを考えた場合、大変重要な章である。しかし『雛燕』で

[29] 五来素川「日と月」『動乱の静観』東宛書房、1937 年、12-13 頁。
[30] 渡辺貴規子、前掲書、302-311 頁。
[31] 『雛燕』、91 頁 8 行目（後ろから 3 行目）～92 頁 3 行目。

は翻訳の対象にはならなかった。

原典の第 13 章は、主人公がマロクールの風景を観察する場面であり、風景描写が章の大半を占めるため、あらすじには直接関係がないと見なされ省略されたと考えられる。原典第 17 章は、主人公の友人の女子工員が機械で指を切断するエピソードが書かれ、第 35 章には、主人公の両親と実の祖父である紡績企業経営者との不和について記述された。主人公の祖父が、息子夫婦（主人公の両親）を罵る言葉も含む場面である。残酷な場面や、親子間の不和を描く場面も削除された。

このような、原典と翻訳との章の構成の相違から、とくに二点を指摘したい。第一に、主人公がどのような少女として描かれたかという点に着目した場合、原典から翻訳へ、大変重要な改変がなされた。つまり、主人公の徒歩での一人旅が、汽車の旅に改変された点、「ロビンソナード」のエピソードが削除された点である。改変の理由として、少女にあまりにも過酷な経験をさせないよう配慮されたことが、まずは考えられるだろう。しかし同時に、「意志の研究」という原作の主題を五来が理解せず、不要であるとみなしたこともうかがえる。

第二に、親子間の不和のエピソードの削除が、『家庭小説　未だ見ぬ親』と同様に行われた。五来は『家庭小説　未だ見ぬ親』において、主人公と親代わりの場面や親子間の情愛を重点的に、比較的丁寧に訳したのに対し、子が親を悪く言う言葉や、親子間の不和の場面は翻訳しなかった[32]。同様の翻訳方法は『雛燕』でも取られている。原典の前半部、とくに第 1 章から第 6 章までの主人公がパリで最愛の母親と死別するまでは、表現の省略が少なく、原典 1 章につき翻訳 2 章分が当てられる場合もあるなど[33]、比較的丁寧に訳されている。それに対し、後半部は原典の 2 章分を翻訳の 1 章分に収めるよう短縮される場合も見られる[34]。その結果、翻訳では職業小説としての側面は後景に退き、家族の物語としての側面が強まった。

物語の後半部における、主人公の女子工員、通訳としての働き、企業内の陰謀、労働環境の改善というあらすじは、尊重された。しかし細部は捨象され、まるでダイジェストのように翻訳がなされた。主人公は働く少女として書かれ、結末では幸福を手にすることは原典と翻訳に変わりはない。しかし、その過程で彼女がいかに考え、判断し、行動したのか、そして原作者が「意志の研究」という主題を意識して執筆した文言について、翻訳では限定的な形でしか表現されていない。この点について次章で数例の具体例を見たい。

６　翻訳の実際

まず、原典第 4 章における、主人公の母親が主人公に残す遺言を検討したい。引用内の一番上が原典の文、次に筆者による訳、最後に『雛燕』の訳文を示す。

> - C’est cela, oui, c’est cela : tu arrives à Maraucourt ; ne brusque rien ; tu n’as le droit de rien réclamer, ce que tu obtiendras ce sera par toi-même, par toi seule, en étant bonne, en te faisant aimer... il est impossible qu’on ne t’aime pas... Alors, tes malheurs seront finis.（*EF*, p.54）
> 「そうよ、そのことよ。お前はマロクールに着く。決して急いではいけないよ。お前には何も要求する権利はないの。お前が得るものはお前自身の力で得なくてはいけないよ。自分一人の力で。善良でいることで、愛されることで。お前が愛されないなどということはあり得ないわ。そうすれば、お前の不幸も終わる。」(拙訳)
>
> 「あゝ左様々々…お前が宮古へ行つて…けれど焦慮（あせ）つてはいけません…お前の方から本名を名乗る前に、たゞお前は皆様の気に入るやうによく勤めて、さうして後で名乗つて、お前がお世話になるやうにしなければいけません…お前のために勤めるので

[32] 渡辺貴規子、前掲書、307-311 頁。

[33] たとえば、原典の第 4 章は『雛燕』では「引越」と「馬市場」という章題の二つの章に翻訳された。

[34] たとえば、原典の第 23 章と第 24 章は『雛燕』では「意外なお手柄」という章題の一つの章にまとめられて翻訳された。同様に、原典第 28 章、第 29 章は「泥酔者の代り」、第 30 章と第 31 章は「秘密の手紙」、第 33 章と第 34 章は「女先生」、第 39 章と第 40 章は「大団円」という章題の 1 つの章に、それぞれまとめられ翻訳された。

すから、ね…解りましたか…お前は皆様の気に入るやうに出来るでせう。花枝のやうな児が…人様の気に入らないことが…ありはしません。…さうさへ成れば...もうお前の困ることはないでせう」（『雛燕』、84-85 頁。下線は引用者による。）

原文において「お前が得るものはおまえ自身の力で得なくてはいけないよ、自分一人の力で」と説かれる場面で、翻訳では「お前の方から本名を名乗る前に、ただお前は皆様の気に入る様によく勤めて」と改変された。原典では、「お前自身の力」「自分一人の力」と主人公自身の能力が重視されるのに対し、翻訳では「皆様の気に入る様に」と、他者から好かれることの大切さが繰り返される。次の引用は、主人公の家庭教師の女性が、主人公の作文を賞賛する言葉である。

Je lui ai demandé une petite narration sur Maraucourt; en vingt lignes, ou cent lignes, me dire ce qu'était le pays, comment elle le voyait. En moins d'une heure, au courant de la plume, sans chercher ses mots, elle m'a écrit quatre grandes pages vraiment extraordinaires: tout s'y trouve réuni, le village lui-même, les usines, le paysage général, l'ensemble aussi bien que le détail; il y a une page sur les entailles avec leur végétation, leurs oiseaux et leurs poissons, leur aspect dans les vapeurs du matin et l'air pur du soir, que j'aurais cru copiée dans un bon auteur, si je ne l'avais vu écrire. Par malheur la calligraphie et l'orthographe sont ce que je vous ai dit, mais qu'importe! C'est une affaire de quelques mois de leçons, tandis que toutes les leçons de monde ne lui apprendraient pas à écrire, si elle n'avait pas reçu le don de voir et de sentir, et aussi de rendre ce qu'elle voit, et ce qu'elle sent. (*EF*, p. 234）
私は、マロクールについて、ペリーヌに作文させました。20 行でも、100 行でもいいので、この地方はどんな地方か、そして彼女はどう思うのかを書くように。彼女は一時間もしないうちに、ペンを走らせ、言葉を探すこともなく、大きな紙 4 頁もの、本当におどろくべき文章を書いたのです。そこには村そのものも、工場も、一帯の風景も、細かな点も全体も、凡てが書かれていました。泥炭掘についての一ページなど、植物、鳥、魚や、朝もやに包まれる眺め、夜の澄んだ空気まで、もし彼女が文を書いているところを見なかったら、立派な作家の文章を写したのだと思ったでしょう。残念ながら、字と綴り字は、申し上げた通りです。しかしそれが何だと言うのでしょう！そんなものは数か月のレッスンで済むことです。しかしそれに対して、あのように見て、感じる能力、そして見たもの、感じたことを表現する能力は、生まれつき備わっていなければ、どんなレッスンでも習得させることはできないでしょう。（拙訳）

本に此の子が教育を受けなかつたら大変で御座いましたね、此の位利巧なのは御座いません、宮古と云ふ題を出して作文を作らして見ましたら、此の村の大体の事、くはしい事、それから沼に居る動物や植物や、くはしく観察して書きました、其の手際は大家の文章を見る様です、もう三四ヶ月も経ちましたら、如何に立派になるでせう。(『雛燕』、235 頁。）

原典では、主人公が泥炭堀やマロクールで生き抜く中で培った「見て、感じる能力、そして見たもの、感じたことを表現する能力」が絶賛される。しかし、翻訳では、「その手際は大家の文章を見る様です、もう三四か月も経ちましたら如何に立派になるでしょう」と、文章の上手さを主に賞賛し、重要な点を欠いた、曖昧な訳となっている。さらに、原典で上の引用に引き続き書かれる、次の文章は、翻訳では削除された。

Ne trouvez-vous pas, dit-elle enfin, que savoir créer ce qui est nécessaire à ses besoins est une qualité maîtresse, enviable entre toutes? (*EF*, p. 234）
自分にとって必要なものを作り出せる能力というのは、何よりも重要で、何よりもうらやむべき能力であるとは思われませんか？(拙訳)

Je n'estime rien tant dans la vie que la volonté à qui je dois d'être ce que je suis. C'est pourquoi je vous demande de la fortifier chez elle [=Perrine] par vos leçons, car si l'on dit,

avec raison qu'on peut ce qu'on veut, au moins est-ce à condition de savoir vouloir, ce qui n'est pas donné à tout le monde, et ce qu'on devrait bien commencer par enseigner, si toutefois il est des méthodes pour cela ; mais en fait d'instruction, on ne s'occupe que de l'esprit, comme si le caractère ne devait point passer avant. (*EF*, p. 234-235）
私は人生で意志ほど大切なものはないと思っている。今の私があるのは、意志の力のおかげだ。だから、私はあなたに、あなたのレッスンによって彼女の内面に意志を鍛えてほしいと思っているのです。というのも、やろうと思えば何でもできると言われるのが正しいとしても、それは少なくとも何をしたいか分かっていなければならないし、そういったことが全員にもともと備わっているわけではないので、教育から始めなくてはならない。そのための教育方法があったらですがね。しかし実際の教育では、知力しか問題にせず、まるで人格が知力よりも優先されてはいけないかのようだ。(拙訳)

一つ目の引用内の「自分にとって必要なものを作り出せる能力というのは何よりも重要で、何よりもうらやむべき能力ではないでしょうか」という主人公の家庭教師の言葉、二つ目の引用内の「人生で意志ほど大切なものはない」「彼女の内面に意志を鍛えてほしい」という、主人公の祖父の言葉、つまり、マロがこの小説で描きたかった「意志の研究」に関する記述は、訳出さえされなかった。これらの省略が、あらすじには関係ないと考えられたためになされた可能性も否定できない。しかし、本稿ですでに見た、原典から翻訳への章構成の改変、五来の女性観を併せて考えると、主人公の少女の自立性が弱まる様に翻訳されたのではないかとも考えられる。五来は『雛燕』の結末を次のように独自の文言で締めくくる。

此様にして旅先きで産み落され、旅先きで親鳥に死なれ、森から森、軒から軒とさまよひ行いた雛燕は、とうとう本巣に帰つて、目出度く懐しいお祖父様に逢ふことが出来たのである。是から先きは、今まで難儀をした中、種々世話になつた人達を親切にして世をうれしく暮した。否親切にして呉れなかつた人達までも、皆それぞれ世話をしてやつて、幸福に世を送つたと云ふことである。めでたしめでたし。（『雛燕』、278 頁。）

原典の結末では、主人公が成し遂げた労働環境の改善の結果を祖父と視察した後、主人公がいつか結婚し、紡績企業が主人公の人生とともに益々発展していくという希望が示唆される。しかし、『雛燕』には、企業の発展に関する記述はなく、主人公の幸せは「懐しいお祖父様に逢ふことが出来た」ことに帰され、「雛燕」というタイトルもこの結末に由来することが判明する。社会的な成功と家族との再会の両方が主人公の幸福であることが明示される原典に対し、翻訳ではただ、家族との再会のみに、それが帰されてしまっている。

7　まとめ

主人公が意志の力で困難を乗り越え、自立的な女性へと成長を遂げる *En famille* という小説は、『新少女』という進歩的な少女雑誌で紹介され、読者に人気を博した。この小説が雑誌の編集方針にも合致した可能性も高く、少女が母と死別して孤児になり、一人で旅をし、紡績企業で働きながら、様々な困難を乗り越え、祖父との再会を果たすというあらすじは尊重して翻訳された。しかしながら、実際の『雛燕』の翻訳の様相を見ると、少女の一人旅は汽車の旅となり、「ロビンソナード」は省略され、主人公の自立性を表す表現、「意志の研究」という原典の主題に関わる文言は曖昧になり、削除された。そして結末において主人公の幸福は、祖父との家族としての再会にだけ帰された。五来は *En famille* の物語の重点が、孤児の少女の実の家族との再会にあるように翻案した。その結果、マロが重点を置いて執筆した「意志の力による絶え間ない努力以外に何の支えもな」い少女がいかに生き抜いたのか、という側面は弱められた。保守的な女性観を持つ五来が、主人公の過酷な試練、自発的な行動や意志の表現に制限を加えるように翻訳したとも考えられるのである。

本稿では、紙幅の関係もあり、とくに原典と翻訳の本文の比較について、原典における女子教育観に関わる記述を中心に論じ、他の個所が十分に論じられなかった。別稿に譲りたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和 3 年度～5 年度）の研究成果をまとめた一部である。